

ザ・ブックス

今、自らを梁山泊におき、これから水滸伝を
生きようとしている建築少年たちへ

現代建築水滸伝—建築少年たちの夢—
布野修司 著

1960年代以降現在に至るまで、第一線で活躍してきた8人の建築家と一つの設計集団について、その今日に至るまでの歩みを、彼らの言説や著者との対話を通して、「1968年世代」の代表でもある著者が、自身の活動をも折り返みつつ概観した評伝である。本書で取り上げられているのは、登場順に、安藤忠雄、藤森照信、伊東豊雄、山本理顕、石山修武、渡辺豊和、象設計集団、原広司、磯崎新である……。そのように紹介するのが本来だろうが、評者としては、序章と終章の大半が、それぞれ黒川紀章と白井晟一に充てられている点にも言及しておきたい。

特に、白井晟一が、終章「建築の根源—建築少年たちへ」を担っている事実は、著者の並々ならぬ思いを伝えているとあってよいのだろう。

実に丁寧に彼らの言葉と向き合った著作である。読みの量と深さには敬服するばかりであるが、さらに、各章をつなぐ横糸として、前川國男、丹下健三、大野勝彦、宮内康といった人々や、自らが参画した雑芥子、「群居」などの活動を織り込むことで、独立した評伝の集積になりがちな構成に立体感を与え、有機的に展開させることに見事なまでに成功している。大変読みやすいので、気楽に読める評論集と評することもできよう。評者も一気に読み終えた。一読すれば、著者自身の活動の広がり、それを支える並外れた行動力が明らかとなる。しかし、それだけではこのような著作には仕上がらない。この読みやすさの背景には、著者の並々ならぬ覚悟と一貫した姿勢がある。

序章に、本書の契機として、「近代の呪縛を捨て」という連載との運命的な出会いがあり、「近代建築をどう



彰国社、四六判、368頁
定価2,625円(税込)
東京都新宿区富久町8-21
TEL 03-3359-3235

批判的に乗り越えるか」という問題意識があり、その後、最初の著作である「戦後建築論ノート」刊行までの経緯が語られるが、「近代建築をどう批判的に乗り越えるか」という問題意識は、少なくとも戦後日本に関する限り、とりわけ著者にとっては「建築計画学をどう批判的に乗り越えるか」という問いでもあったことは想像に難くない。ならば、近代建築への批判もポストモダニズムへの称賛もともに両刃の剣となる。本書の読みやすさは、この問題に対する深い認識によって担保されている

と考えるべきだろう。もちろん、いずれも今日においてなお、「一枚のスケッチを予告する『均質空間』に対する根源的批判の論理は未完である」。この先は、再び「建築少年たち」に託される。

1960年代から今日までといえば、すでに半世紀以上である。この時代を知る建築関係者なら、たとえ著者と同一世代でなくても、現代に至る建築思潮が記録映像のように甦るに違いない。だが、著者が本書を献じようとしているのは、そうした年代の読者ではない。すでに述べたように、終章の「建築の根源—建築少年たちへ」が示唆している「建築少年たち」である。今、自らを梁山泊におき、これから水滸伝を生きようとしている世代である。現代の「建築少年たち」に、本書の声が届くか否か、評者にはわからない。しかし、是非、読んで考えてみていただきたいと思う。

私自身は、こうした言説と距離を置いてきたところがあり、それだけに空白を一挙に埋める術を得たような印象もあったのだが、同時に、なぜ避けてきたのか、その間、何をしていたのかを改めて考える契機となった。

(うちだ よしお)